

八代海（不知火海）はこんな海です

- * 概要 南北40キロ、東西20キロの内海。水深の平均は約24メートル。内海としては日本で一番閉鎖性が高い海。1日に2回深呼吸をする。そのため外海と接する海域では急流となり渦潮も見られる。
- * 海岸はリアス式海岸が多い。干満の潮位差も大きい。3.5メートルほど。複雑に入り組んでいて変化に富んでいる。
- * 入江が奥深く入り込み、気温が安定していてミカンがよく育つ環境を作り出している。厳寒期に霜が降りにくい。袋湾は「化石の海」とも称される。太古の時代からひっそりと生き続けてきた海辺の生き物たち。
- * リアス式海岸ということで貝類や海草が多種でありまた豊富である。人は大潮の時はこぞって浜辺に出る。その日のおかずであったり、一年分のヒジキやワカメなども採られる。恵みの海。人と海との深い関わりがある。このことが災いともなった。（水俣病の拡大）
- * 人々は海を中心にして向かい合って暮らしてきた。「環不知火海生活圏」の存在。後背地は山ばかり。
- * 向かいの獅子島で初めて自家発電により電気の火が灯ったのが昭和34年。この時水俣はチッソの全盛時代。不夜城の如く輝いていた。周辺の島民の多くが、水俣に吸い寄せられるように集まり、水俣は急速に膨れ上がっていった。
- * 代表的な魚は「シロ子」と呼ばれるカタクチイワシの稚魚とタチウオであろう。打たせ船で捕れる足赤エビ（クマエビ）はかつては全国津々浦々で存在していたが今ではこの海域でしかみられない、幻のエビである。動力を使わず、風と潮の流れだけを利用した漁法が乱獲を防いできた。
- * 子育ての海。シロコが大量に発生する時期を見計らってアジ・タチウオ・タイ・ハモ・スズキなどの大型魚類が大挙してなだれ込んでくる。生まれた稚魚はやがて成長して外海へと帰っていく。
- * 「魚湧く海」と呼ばれた豊かな水俣の海を支えてきたパワーの源は湧水と森にある。大きな河川は水俣川（2級河川）しかない。沿岸部には無数の湧水がある。大きなものは水俣市の年間降水量の三分の一の水量ある。舐めたらわかるが、少し甘味が感じられる。塩分濃度が低いと思われる。
海岸を覆い尽くすかのように、こんもりと森が栄えている。シャリに大きなすしネタが乗り切れない感じ。「森は海の恋人」水俣では遠い山々もあるが、間近に森が多い。
- * 近年、海が痩せ細ってきた感がある。同時に自然のリズムも狂ってきている。かつての汚染された海からは再生されたが豊かな海が戻ってきたとはいいがたい。むしろ悪化しているようだ。原因は諸説あるがそれぞれにうなづけるものだ。獲りすぎ、地球温暖化による海水温の上昇などなど。この現象は水俣固有のものではない。「地魚」が姿を消そうとしている。水産資源の物流の変化も加わり、日本の沿岸漁業は危機に直面する。
- * 水俣市の市民総生産（GDP）の内、水産業が占める割合は0.7%。（昔も今も変わらない）かたやチッソは関連会社を含めれば50%に迫るとと思われる（当時）。チッソを守り、海を捨ててきた為政者の歴史を振り返ると、過ちの大きさがよくわかる。人と自然の関わりを根本から問い直していくべき時と思う。